

昭和初期、岐阜市周辺の能楽愛好について 熊田徳松旧蔵能狂言資料から

南本 有紀

The Devotee of Noh and Kyogen Plays in 1920-30s Gifu
An Introduction to the KUMADA Tokumatsu Collection

Yuki MINAMIMOTO

はじめに

本稿では、平成 23 年（2011）11 月に岐阜市某家より寄贈された能楽¹⁾関係資料を紹介する。当該資料は、明治末、名家に生を受け、昭和半ばまでを趣味に生きた一風流人の残した資料群である。同好の士でもあった女婿が義父の遺品を受け継いだ、このほどその人物も亡くなったため、遺族より当館に託されることになった。ここでは、まず、この資料群の概要を示し、ついで、詳細を、とくに狂言資料について取り上げ、最後に、時代背景として当時の能楽界の動向を簡単にまとめようと思う。

本稿を準備する過程で、明治～昭和半ば、明治維新によってパトロンを失い、迷走しながらも、やがて、鍛えられた芸の力によって見事に甦り、他分野の舞台芸術とのコラボレーションに挑むなど果敢な発展を見せた近代能楽史の一端に、いわゆる素人の能楽愛好者たちの営みが深くリンクしていたことに気づかされた。地方都市に生きたふつうの趣味人の所産である、この一群の資料が、ある時期、斯界の底辺を支えていた地方文化活動の確かな証であることを記しておきたい。

1 旧蔵者と資料の概要について



図 1 熊田徳松肖像（個人蔵）

当該資料群の旧蔵者である熊田徳松（以下、敬称略）は、明治 22 年（1889）11 月 15 日、岐阜市に生まれ、昭和 39 年（1964）3 月 15 日に没するまで同市蕪城町に暮らした。生家は裕福な地主で、空襲で家を焼き、親戚方に居候したり、炭屋を経営していたりした戦後の一時期を除き、借地・借家業を営み、自由になる多くの時間を書道や、囲碁、麻雀などに費やした趣味人であった。中でも、謡と狂言には熱心に取り組み、近隣に弟子を持つほどの腕前だったという。

写真（図 1）は、狂言の装束を身につけた徳松翁である。楽屋で撮影されたものだろうか。角頭巾に長衣をつけ、出家座頭の出立で少し得意げに見える。もしかして、免状（図 2）が残っている「月見座頭」の舞台だろうか。

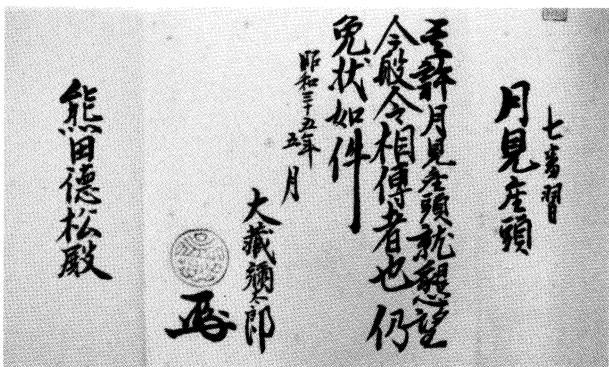


図 2 大蔵流狂言免状（部分）

謡は観世流、狂言は大蔵流を習得し、晩年の昭和 20～30 年代（1945-64）には多くの舞台を踏んでいたようすを記録にたどることができる（表 1）。本稿で紹介する資料群は、翁が稽古に使った謡本や狂言台本と若干の書簡・記録類（表 2）である。以下、これらの資料を種類別に見ていこう。

1－1 流派と稽古・演能歴

表 1 熊田徳松演能記録一覧

	会	開催日	会場	主催	後援	入場料	演目	※1	役	備考※2
1	同胞援護会 第1部	昭和22年6月15日	岐阜市公民館	同胞援護会岐阜支部	岐阜観世会	有料	能 杜若 恋之舞	×	地謡	シテ 片山九郎右衛門
2	淡交会 秋季別会	昭和22年11月23日	かわら屋(岐阜)	岐阜淡交会		無料	独吟 琴之段		謡	咸陽宮より
3	岐阜観世会 岐阜護国神社 奉納能組	昭和23年5月15日	岐阜護国神社	岐阜観世会		無料	素謡 神歌		地謡	
							囃子 巻納		地謡	シテ 早川輝吉
							素謡 藤戸		ワキ	
4	淡交会	昭和23年10月10日	大塚宅	名古屋淡交会		無料	素謡 七騎落		シテツレ	
5	岐阜淡交会 故加納寿一氏 追善謡会	昭和23年11月23日	万松館(岐阜)	岐阜淡交会		無料	素謡 善知鳥		シテツレ	
6	淡交会	昭和24年3月13日	名古屋商工会議所(大池町)	淡交会	名古屋邦楽協会	無料	能 小袖曾我		地謡	シテ 柴田初太郎
									シテ	高橋静夫
7	淡交会 観世宗家歓迎舞謡会番組	昭和24年4月24日	八勝館(八事)	名古屋淡交会		無料	素謡 道成寺	×	ワキツレ	
8	松謡会 創立25周年記念謡会	昭和24年5月5日	万松館(岐阜)	松謡会	岐阜観世会 延縁会	無料	素謡 葵上		シテツレ	
9	岐阜淡交会 春季別会 素謡組	昭和24年5月22日	かわら屋(岐阜)	岐阜淡交会		無料	独吟 実盛		謡	
10	岐阜県観世連合会 第2部	昭和24年10月25日	岐阜市公会堂	岐阜県観世連合会	岐阜市	有料	能 石橋	×	地謡	シテ 橋岡久太郎
									シテ	橋岡久馬
11	岐阜淡交会 秋季別会 演能組	昭和24年11月27日	岐阜市公会堂	岐阜淡交会	東海夕刊新聞社	無料	能 船弁慶		地謡	シテ 高橋静夫
12	岐阜市観世流連合会 午後の部	昭和26年6月10日	岐阜市公会堂	岐阜市 岐阜県観世流連合会		有料	能 通小町 雨夜之伝		地謡	シテ 杉浦義朗
13	岐阜淡交会 浴衣会	昭和26年7月29日	長良川畔御堂会館	岐阜淡交会		無料	素謡 玄象		ワキツレ	
14	岐阜観世会 追善能	昭和26年10月14日	岐阜市公会堂	岐阜観世会		有料	能 松風		地謡	シテ 観世元正
15	岐阜淡交会 池上重雄氏 追善会	昭和27年4月20日	岐阜市公会堂	岐阜淡交会		無料	独吟 恋重荷		謡	
							能 通小町		地謡	シテ 高橋静夫
16	岐阜誠交会	昭和27年11月29日	岐阜市公会堂	岐阜誠交会	岐阜観世会	無料	狂言 伯母が酒		アド	シテ 古田恒二*
17	岐阜観世会	昭和28年10月18日	岐阜市公会堂	岐阜観世会		有料	能 班女		地謡	シテ 木原康次
18	土筆会 狂言組	昭和29年3月21日	万松館(岐阜)	土筆会 茂山千五郎 茂山千之丞 岐阜淡交会		無料	狂言 井端		シテ	
19	岐阜淡交会 春季別会 素謡組	昭和29年4月18日	万松館(岐阜)			無料	素謡 葵上		シテツレ	
20	岐阜観世会 素謡組	昭和29年8月29日	万松館(岐阜)	岐阜観世会		無料	素謡 安宅		シテツレ	シテ 片山九郎右衛門
21	岐阜淡交会 秋季別会 素謡組	昭和29年10月10日	万松館(岐阜)	岐阜淡交会		無料	独吟 老松		謡	
22	岐阜誠交会 能組	昭和29年11月23日	岐阜市公会堂	岐阜誠交会		無料	狂言 萩大名		アド	シテ 古田恒二*
23	岐阜県観世連合会 故瀬古安太郎氏追善能会	昭和30年5月8日	岐阜市公会堂	岐阜県観世連合会	岐阜観世会	無料	狂言 腰折		次アド	シテ 古田恒二*
24	幸友会 八世初太郎・九世五郎追善 第2日 素人能	昭和31年11月17日	熱田神宮能楽殿	幸友会	中部日本新聞社	無料	狂言 太刀奪		アド	アド 茂山千之丞
25	関市 春日神社祝賀奉納能楽	昭和33年5月17日	春日神社(関市)	春日神宝殿落成協賛会 岡崎玉声会 後藤基生会 名古屋能楽会 名古屋宝生会 中部日本新聞社 朝日新聞社		無料	能 船弁慶		地謡	シテ 村木ゆかり*
							狂言 佐渡狐		次アド	シテ 片桐鏡次郎*
26	名匠鑑賞会 第35回	昭和34年3月15日	熱田神宮能楽殿	名古屋能楽鑑賞会		有料	狂言 唐相模		次アド	シテ 茂山千五郎
										アド 茂山千之丞
27	岐阜幸友会 10周年記念大会	昭和34年4月29日	岐阜市公会堂	岐阜幸友会		無料	狂言 三本柱		シテ	
28	土筆会	昭和36年4月16日	日の丸会館	土筆会		無料	狂言 彌富山伏		アド	シテ 村瀬顕正*
							狂言 石神		アド	シテ 村木喜三*
29	岐阜誠交会 15周年記念大会	昭和37年5月3日	岐阜市公会堂	岐阜誠交会 興善助		無料	狂言 蝸牛		アド	シテ 片桐鏡次郎*

能楽番組検索システム(<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~miki/search.html>)より作成

データベース以外の出典

※1 資料群に謡本・台本のない演目

※2 *はプロ能楽師ではない(素人)演者

表 2 熊田徳松旧蔵資料① 記録類

No.※	種類	題名	点数	寸法(cm)	年代(発行)	付属品	備考
52	書簡	(昭和25年度芸術賞受賞記念品送付状)	1	W35.5 L24.1	昭和26(1951)1月	封筒(W19 L46)	橋岡久太郎より熊田徳松宛
55	印刷	淡交会報 No.1	1	W26.5 L36	昭和26(1951)7月		委員会役割・顧問に熊田徳松 破れ
53	ノート	記録／観世会	1	W24.5 L17	昭和27～28(1952-53)	紙片	紙片に「熊田徳松／昭和39年没 79才／高橋静夫 橋岡久太郎／岐阜掬水会会計」
50	免状	本神文 末広かり外四十四番	1	W20 L52.5	昭和30(1955)3月		発行は大蔵弥太郎、取立は茂山千之丞
33	番組	岐阜掬水会秋季大会	1	W24 L8.4	昭和30(1955)10月2日	封筒(W18.3 L71) 案内状(W45.4 L18)	「岐阜市金町7丁目／広瀬園一」より「熊田徳松」宛 岐阜掬水会長・加納恒久より熊田徳松宛 尾上榮舟作詞・橋岡久太郎作曲、観世流改訂本刊行会 裏面にペン書「岐阜市蕨城町／熊田徳松様」、印「東京、赤坂局 榎坂町四番地／橋岡久太郎」、切手・スタンプ「麻布／30／12.6」
6	ハガキ	早春	1	W10.1 L14.2	昭和31(1956)1月		寂光院 日付は朱印より
40	ハガキ	大原御幸古跡	4	W8.8 L13.9 4枚	昭和33(1958)6月18日	包紙(W24.4 L17) 朱印(W10.5 L18.2)	会場は、観世会館(新宿区新小川町2-10) 差し出しは、静交会・高橋静夫(武蔵野市)
38	冊子	静交会 廿五周年記念別会	1	W15.8 L22.5	昭和33(1958)11月22日		川田順作詞・橋岡久太郎節付、観世流改訂本刊行会
7	ハガキ	光	2	W10.2 L14.2 2枚	昭和35(1960)1月		発行は大蔵弥太郎
59	免状	七番習 月見座頭	1	W22 L18	昭和35(1960)5月	包紙	
34	番組	狂言組(土筆会)	1	W18.3 L48.7	昭和36(1961)4月16日		会場は、日の丸会館(神田町4) 土筆会補導は茂山千五郎・千之丞
4	ハガキ	草原	2	W10.2 L14.2 2枚	昭和38(1963)元旦		川田順作詞・橋岡久太郎節付、能楽書林 観世流改訂本刊行会
39	免状	求塚	1	W24 L13	昭和38(1963)11月	包紙	発行は観世元正、取立は高橋静夫

※ No.は原資料整理時の整理番号、以下同

最初に、徳松の舞台歴を一覧²⁾(表1)にして示した。遺族によると、徳松は16歳のときに謡を始めた³⁾というのが、残念ながら大正～昭和10年代の演能記録は残っていない。表中の範囲で判明する限り、最初、謡に親しみ、その後、狂言を習い出したようで、晩年は専ら狂言に熱中していたようすが窺える。狂言ではシテやアドも勤めているが、能については、少なくとも自演会では謡のみで、立方や囃子は人前で演じなかったようだ。

徳松資料の大半は、後に詳述する謡本と狂言台本であり、稽古・演能関係の記録類は表2のとおり多くはないものの、同好会の記録や師匠からの書簡などがある。これによりわかる徳松の稽古歴は以下のとおりである。

- ・能(謡)は観世流を、橋岡久太郎⁴⁾、高橋静夫⁵⁾、柴田初太郎⁶⁾に師事
複数の同好会(淡交会、観世会など)に所属
遺族によると、稽古場は震災記念堂(岐阜市若宮町)
- ・狂言は大蔵流を、茂山千五郎・千之丞に師事
同好会は土筆会に所属
- ・いずれも免状を授与される習熟度で、遺族によると、自宅で数人に教えていた
おそらくは、実際の演能活動も、記録が残る晩年の20

表3 熊田徳松参加同好会

団体※1 指導		氏名※2	備考	件数	活動期間	年数	頻度	能楽番組検索システム※3	他の所属・出演団体※4
昭和12(1927)3/15～20(1954)6/7 岐阜観世会		早川輝吉		169	明治44(1911)2/19～昭和35(1960)11/6	50	3.4	本巢観世会、露会、長生会、名古屋能楽師協会、名古屋能楽会、長能会、観世九草会、淡交会、松園会、観友会、掬水会、清韻会、延縁会、観興会、鶴声会、鳳鳴会、岐阜誠交会、酒水会、幸友会	
		飯尾義之	観世流師範	59	大正13(1924)1/20～昭和34(1959)4/29	36	1.6	保能会、露会、長生会、長能会、岐阜松園会、延縁会、淡交会、岐阜誠交会、岐阜幸友会	
		清水紅一		12	昭和2(1927)4/29～28(1953)10/18	27	0.4	大垣露会、大垣寿会、淡交会、松園会、延縁会	
		山崎千三		18	昭和2(1927)4/29～31(1956)11/17	30	0.6	大垣露会、淡交会、延縁会、岐阜松園会、幸友会	
		熊田徳松		28	昭和22(1947)6/15～37(1962)5/3	16	1.8	松園会、岐阜誠交会、幸友会	
		村木喜三		62	昭和13(1938)2/20～42(1967)9/10	30	2.1	露会、長生会、長能会、岐阜松園会、竹翠会、掬水会、和光会、謙誼会、幸友会、岐阜誠交会	
		川島兵助		125	昭和17(1942)11/3～58(1983)4/8	42	3.0	長生会、長能会、名古屋能楽復興研究会、岐阜松園会、和交会、竹翠会、延縁会、たなびき会、幸友会、岐阜掬水会、龍吟会、岐阜長月会、颯々会、桂会、名古屋清韻会、岐阜誠交会、桑名観世村南会、鳳韻会、石井会、春鶯会、岐阜朗声会、豊雲会、露会、巽会	
		白木豊	白木眼科	64	昭和22(1947)11/2～63(1988)5/29	42	1.5	岐阜松園会、たなびき会、延縁会、露会、桂会、名古屋能楽倶楽部、幸友会、岐阜幽誼会、岐阜能楽同好会	
		小野三郎		17	昭和23(1948)5/15～30(1955)5/8	8	2.1	淡交会、松園会、延縁会、岐阜誠交会	
		伊藤友治郎		15	昭和23(1948)5/15～34(1959)9/20	12	1.3	淡交会、延縁会、岐阜誠交会、幸友会	
		大橋武雄	1954年1月休会	22	昭和23(1948)5/15～55(1980)4/6	33	0.7	淡交会、延縁会、たなびき会、桂会、朗声会、長生会、岐阜幸友会、鳳声会・鳳月会・岐陽会・恵誼会	
		古田恒二	古田産婦人科	34	昭和22(1947)11/2～55(1980)4/6	34	1.0	岐阜松園会、たなびき会、延縁会、岐阜誠交会、幸友会、岐阜幽誼会	
		塚本藤之丞		7	昭和25(1950)3/19～30(1955)5/8	6	1.2	延縁会、岐阜誠交会	
		長野藤二	岐阜商校校長	8	昭和25(1950)3/19～30(1955)5/8	6	1.3	延縁会	
昭和12(1927)3/15～20(1954)6/7 岐阜淡交会	橋岡久太郎・高橋静夫	村木孫七		20	昭和22(1947)11/2～35(1960)9/11	14	1.4	岐阜松園会、淡交会、延縁会、長生会	
		丹羽文一		10	昭和25(1950)3/19～30(1955)5/8	6	1.7	延縁会、岐阜誠交会、土筆会	
		村瀬顕正		84	昭和25(1950)3/19～平成4(1992)4/25	43	2.0	延縁会、幸友会、岐阜誠交会	
		小島祥民	1953年5月死亡	4	昭和25(1950)3/19～27(1952)11/29	3	1.3	延縁会、岐阜誠交会	
		松田充	委員長	13	昭和12(1937)2/7～30(1955)5/8	19	0.7	名古屋保能会、長生会、金竜会	
		矢島力弥	副委員長	53	昭和22(1947)11/23～50(1975)4/20	29	1.8	掬水会、露会、たなびき会、竹翠会、龍吟会、石井会	
		池上梢	会計	13	昭和22(1947)11/23～30(1955)5/8	9	1.4		
		森田精一	委員	77	昭和21(1946)12/15～61(1986)5/25	41	1.9	長生会、露会、たなびき会、竹翠会、龍吟会、掬水会、和光会、鶴声会、謳誼会、松和会、岐阜能楽同好会	
		広瀬団一		38	昭和22(1947)6/16～48(1973)5/3	27	1.4	岐阜松園会、たなびき会、竹翠会、掬水会、颯々会、桂会、幸友会、岐阜朗声会	
		林栄一		10	昭和22(1947)4/20～27(1952)4/20	6	1.7	たなびき会	
		大野繁一	俳人・真葛野太郎	7	昭和24(1949)3/13～29(1954)10/10	6	1.2		
		石浜鈴奥		2	昭和27(1952)4/20～29(1954)4/18	3	0.7		
		三品喜嗣		26	昭和27(1952)4/20～62(1987)11/15	36	0.7	名古屋観世流太鼓会、雄園会、松和会、岐阜能楽同好会	
		後藤基泰	顧問	16	昭和21(1946)12/15～33(1958)5/17	13	1.2	長生会	
掬水会	熊田徳松	熊田徳松		12	昭和22(1947)11/23～29(1954)10/10	8	1.5	竹翠会	
		加納恒久	会長	3	昭和27(1952)11/23～30(1955)10/2	4	0.8		
		加納小児科							
		広瀬団一							
土筆会	熊田徳松	熊田徳松	会計						
		古田恒二							
		村瀬顕正							
		村木喜三							
		伊藤清子		10	昭和32(1957)4/29～53(1978)9/24	22	0.5	淡交会、名古屋観世流太鼓会、巽会、藤門会、長生会、幸流会、豊雲会	
		片桐敏次郎		37	昭和24(1949)6/5～平成2(1990)11/17	42	0.9	岐阜幸友会、岐阜誠交会、鶴園会・橋園会・岡声会、岐阜淡交会、朗声会、桂会、岐阜能楽同好会、岐阜謙誼会、岐阜掬水会	
土筆会	熊田徳松	山岡良男		16	昭和29(1954)3/21～59(1984)11/17	31	0.5	幸友会、岐阜誠交会	

※1 熊田徳松旧蔵資料から年代と会員の判明する団体
※2 原資料の記載順とした
※3 能楽番組検索システム(<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~miki/search.html>)より作成
※4 ※2欄に重複して名前の挙がっている団体名は省略した

年間に集中的に行われていたと思われる。その時期、同好会では中心的な役割を果たして、師とも個人的・直接的なやりとりが行われ、稽古の成果も上がったのだろう、没年の前年に免状を授与されるなど、充実した老いの生活がしのばれる。

表3には徳松の参加していた能楽同好会についてまとめた。徳松自身もそうなのだが、多くの人物が複数の同好会に重複して参加していてその精勤ぶりに驚かされる。表中にはプロの能楽師⁷⁾、中には囃子方として活躍した人物も含まれ、とくにそういう人は出演団体が非常に多くなっているが、平均して全員が年に1回以上の演能記録を残している。また、メンバーには徳松の義理の息子たちが散見され、聞き取りによれば、そうした縁戚関係による誘い誘われの付き合いもあった由である。限られた記録からも、門弟ネットワークや地縁・血縁関係によって、流友たちの幾重にも重なる結びつきがかいま見える。いずれにせよ、昭和前期の岐阜市近郊には、非常に熱心な能楽愛好層が存在していたのである。

その一例として、大矢田神社拝殿にかけられた奉納額に徳松とその師や門人仲間らの名前がある⁸⁾ので、紹介しておく。(翻刻中、徳松の名に下線を付した。)



図 3 大矢田神社拝殿奉納額

奉納素謡番組

神歌	森喜七 古川鏝一 平田豊
養老	広瀬永治郎 松久達三
田村	後藤庄郎 後藤俊夫 後藤享平
龍田	別府太郎 後藤安次郎 永田昌蔵 別府嵩
トモ	西田岡治
子方	山本京次
橋弁慶	西田日吉 古川健一
善知鳥	村井奥助 遠藤鈕二
仕舞	
雨月	池上重雄
放下僧	三品喜太郎
大江山	古川鏝一
独吟	
松虫	矢島力弥 高橋幸 梅村正口
夜討曾我	井上謙一 大塚次喜蔵
	森喜七 広瀬永治郎
景清	小森彦七 西部恒二
仕舞	
野宮	池上こずゑ
籠太鼓	早戸香甫
善界	小島英幸
	森精一
千手	熊田徳松 大野繁一

	美濃町淡交会
	松久達三
安宅	大野恭三郎 林栄一
勸進帳	
囃子	
船弁慶	日比野盛一 矢島力弥 森秀雄 池上梢
松風	高橋静夫 矢島力弥 森秀雄 後藤基泰 池上梢
鉄輪	川崎治作 西田賢一 井藤茂
紅葉狩	平野正一 佐藤天口 森昭二
仕舞	
高砂	高橋静夫
大矢田謡聲会	
淡交会	
観世流師範	高橋静夫

昭和廿五年十一月三日文化の日⁹⁾

1-2 謡本（観世流改訂本刊行会本）

つぎに、資料群の過半を占める謡本についてリスト（表4）を挙げる。次章で取り上げる狂言台本と同様、謡本については、徳松の演能記録（表1）のある演目について表中網掛けで示した。

さて、全部で187冊ある謡本のうち、20曲／冊が重複本である。これらの曲については、徳松の演能記録と照らし合わせてもとくに関連性を指摘できず、人気曲であることから、自然に同じ曲が集まってしまったのかと推測される。「加納金十郎」印の押された2冊について、遺族に確認したが、この名前には心当たりがないとのことだった。一番綴の稽古本は、古本等で数冊まとめて求めることもあったのではないだろうか、旧蔵者の印なのかもしれない。中には書き込みも見られるが、極めて稀で、保管中の鼠害を除けば、総じて、美品である。徳松が謡上級者であったことも関係しているかもしれないが、この保存状態の良さ（ほとんど未使用であること）は、これらが現行の観世流謡本（大成版謡本）と体裁が異なることも一因だと思われる。実は、徳松旧蔵資料のうち、現行謡本は元の所有者だった徳松の義理の息子（同じく謡を愛好していた）の没後、その知己らに分け与えられており、謡稽古に実用できない「観世流改訂本刊行会本」（以下、「刊行会本」）のみが当館に寄贈されたのである。

この刊行会本は、よりわかりやすく、使いやすい謡本を刊行する目的で、明治41年（1908）から出版が始まった近代的な謡本であった。文字やゴマ節（歌唱記号）

を見やすく工夫し、緩急や発声の大小などを2色刷で示して、さらに曲趣を理解した上で謡えるように詳しい解説を付した新時代の謡本で¹⁰⁾、当時、江戸時代そのままの旧態依然だった謡本の改良に大きな影響を与えた本だったが、それ以上に能楽界を揺るがしたのは、家元以外からの刊行だったからである。節付に協力したのが、「観梅問題」¹¹⁾で家元と対立していた梅若派の観世清之だったこともあり、裁判沙汰に発展したいわくつきの謡本なのだ。家元によって観世流職分（プロ能楽師）らの使用が禁止されたこのシリーズは、どのような経緯で徳松のもとに集まったのか。ちなみに刊行会はのちに能楽

書林という出版社になり、刊行会本系統の本と梅若派独自の謡本を出版している。表2にあるハガキは新作謡を印刷した絵ハガキで、その発行が観世流改訂本刊行会・能楽書林、そして節付（作曲）が徳松の師・橋岡久太郎になっている。幼い家元を補佐し、「観世の大番頭」¹²⁾といわれた橋岡久太郎と刊行会との関係が気になるところだ。

1-3 狂言台本

つぎに、晩年の徳松が熱中した狂言についての資料についても、一覧（表5）にまとめた。

表5 熊田徳松旧蔵資料③ 狂言台本

No.	種類	副題※1	表紙・題名(50音順)	分類※2	※3	寸法(cm)	墨付丁数	備考
18	写本	大蔵流六義	悪坊	出家座頭狂言	○	W14.5 L22.5	7丁	
2	写本	大蔵流六義	石神	髯女狂言	○	W14.3 L22.3	8丁	
26	写本	大蔵流六義	因幡堂	髯女狂言	○	W14.2 L22.7	7丁	
32	写本	大蔵流六義	瓜盗人	集狂言	○	W14.1 L22	7丁	
21	写本	大蔵流六義	伯母ヶ酒	髯女狂言	○	W14.5 L22		
28	写本		蝸牛	鬼山伏狂言	○	W14.2 L22.2	10丁	
42	写本		狐塚小唄	小名狂言		W33.1 L14		
10	写本	鬼山伏狂言	腰折	鬼山伏狂言	○	W14.3 L22.4	7丁	
14	写本	脇狂言六義	佐渡狐	脇狂言	○	W14.2 L22.4	19丁	
19	写本		三本柱	脇狂言	○	W14.3 L22.1	7丁	
27	写本	大蔵流	志ぶり	小名狂言	○	W14.1 L23	5丁	
24	写本	大蔵流	清水	鬼山伏狂言	○	W15 L22.5	8丁	
23	写本	本脇狂言 本神文六	末広がりに	脇狂言	○	W14.5 L22.4	11丁	
8	写本		素襖落	小名狂言	○	W14.2 L22.6	15丁	
22	写本	大蔵流	太刀奪	小名狂言	○	W14.7 L22.2		
61	写本		千鳥	小名狂言	○	W14.2 L22.4	12丁	
30	写本		月見座頭	出家座頭狂言	○	W14.5 L22.1	6丁	
29	写本	狂言小舞	弱法師		○	W14.3 L22.2	2丁	曲中舞(月見座頭)
12	写本		唐音			W25 L17.5	3丁	古田産婦人科医院(岐阜市金町7丁目3)用箋
60	写本		唐音		○	W14.1 L22.2		曲中謡(唐相撲)
31	写本		土筆		○	W14.2 L22	6丁	
47	写本	大蔵流	土筆			W13.1 L18		日記用箋 巻末に、小原木、十七八、盃(途中から破損)、雪山、暁の明星、京童(反転・朱書)
62	写本		井礪	出家座頭狂言	○	W14.3 L22.2	11丁	
45	印刷		平家			W23 L18	2枚	曲中謡(井礪)
25	写本	大蔵流	葉平餅	集狂言		W13 L18	12丁	裏表紙に墨書「土筆会」、朱書「熊田控」
15	写本	大蔵流六義	仁王	集狂言	○	W14.4 L22	8丁	
9	写本	大蔵流六義	禰宜山伏	鬼山伏狂言	○	W14.3 L22.8	10丁	
16	写本		萩大名	大名狂言	○	W14.4 L22.4	16丁	
64	狂言本	本神文 髯女狂言	吹取	髯女狂言	○	W14.3 L22	9丁	
1	写本		布施無経	出家座頭狂言	○	W14.2 L22.4	12丁	
13	写本	大蔵流	二人袴	髯女狂言	○	W14.4 L22.4	19丁	
11	写本	平物 大蔵流六義	船渡髯	髯女狂言	○	W14.6 L21.9	16丁	
20	写本		水掛髯	髯女狂言	○	W12.5 L17.9	11丁	
63	写本		水掛髯	髯女狂言	○	W14.2 L22	11丁	
17	写本	狂言 小舞	(盃、雪山、宇治の晒、小原木、十七八、暁の明星、京童)		○	W14.4 L21.8		
5	写本	狂言				W14.1 L45.3		婚礼の余興か
48	写本	婚礼謡	(高砂、玉乃井、春栄)			W14.2 L22.6		
54	写本		忠霊		○	W21.2 L15.4		新作能
58	写本		定家一字題		○	W14 L22.1	3丁	蘭曲※4
46	印刷		妻戸			W25.1 L18.1	2丁	蘭曲
3	写本		サンヨリ 小塩			W14 L22.7	7丁	

自演記録あり

※1 「六義」は狂言台本、「平物」は曲位の指標(「平物」「内神物」「本神物」「小習」「重習」「極重習」の順に曲位が上がる)

※2 分類は現行大蔵流の呼称

※3 ○は裏表紙に墨書「熊田蔵書」

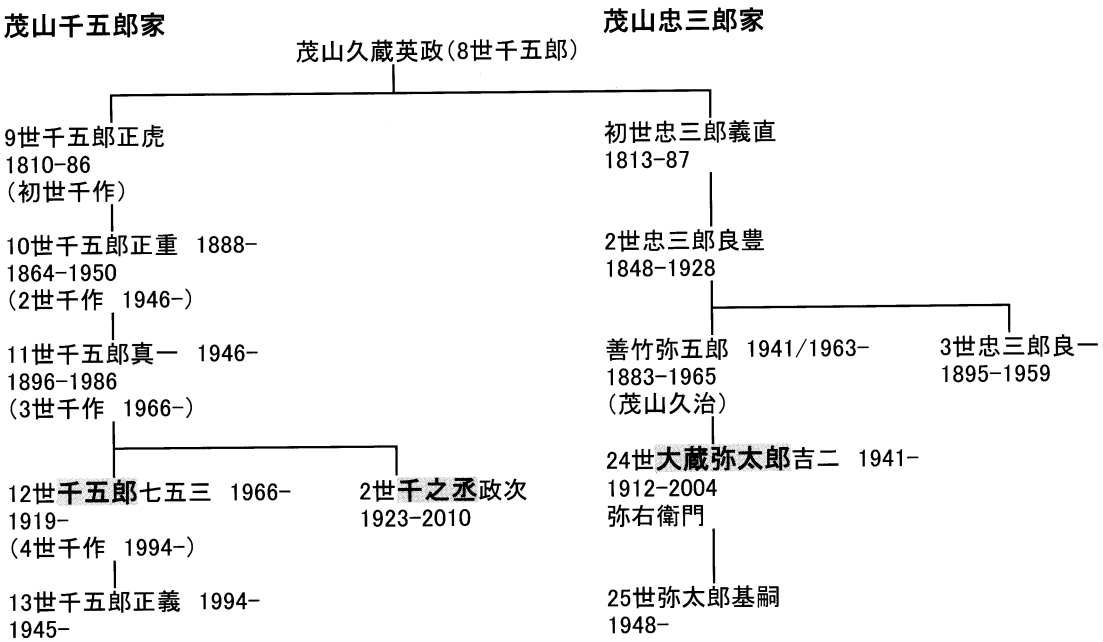


図 4 茂山家系図

最初に書誌的な事項を挙げておこう。一部例外もあるが、多くが本紙と共紙の表紙を持つ横中本で、筆書き、表紙に曲名と脇書（「大蔵流」「六義」など）があり、裏表紙に「熊田蔵書」と墨書、本文に続いて、装束付を付記（本文前にあったり、省略されているものもある）。本文と同筆もしくは朱筆で役あるいは役名（シテ、アド／太、主¹³⁾などや演技内容の指示書きが付され、ところどころ、同筆もしくはペン書きで訂正されている。

ところで、大成した世阿弥の自筆本が残り、当時の台本が現在もほぼそのまま使われている能に対して、狂言の台本は長い間、定着しなかった¹⁴⁾。場の雰囲気に沿った流れや即興的な演技が重視されることで、狂言の台本はフレキシブルにならざるを得なかったし、驚くべきことに、古典演劇となった今もそうなのだという¹⁵⁾。また、能以上に実力本位の狂言は、形骸的な流儀よりも実際の「家の芸」を發展させてきたために、家元の統制が徹底した能に比べて、同じ流派内においても家によって芸風も違えば、台本も違う¹⁶⁾。シテ方より軽んじられた狂言方は明治期に廃絶したり、中絶した流派・家が多く、現在の狂言の芸系は、大蔵流の茂山家（千五郎家・忠三郎家両茂山家の系図を図4に示す）・山本家、和泉流の野村万造家・同又三郎家・狂言共同社の6系統になる¹⁷⁾。

さて、徳松が筆写した、重複を含む約40の台本の内容を検討するには、前述の事情から、その師匠が問題となる。徳松が参加していた狂言同好会「土筆会¹⁸⁾」の指導は、京都在住の大蔵流狂言師、12世茂山千五郎（4世千作）・2世千之丞兄弟が行っていた。また、冒頭に掲げた免状には表記されていないが、資料群の別の免状（表5参照）には千之丞取立で24世大蔵弥太郎から発行された旨が記されている。以上により、翻刻されている狂言台本¹⁹⁾のうち、ここでは大蔵流の以下の3点を対照し、徳松の台本を検討してみた。

・「大蔵虎寛本」…寛政4年（1792）、19世虎寛書写（笹野堅校訂、岩波文庫 能狂言 上・中・下、岩波書店、1942・45年）

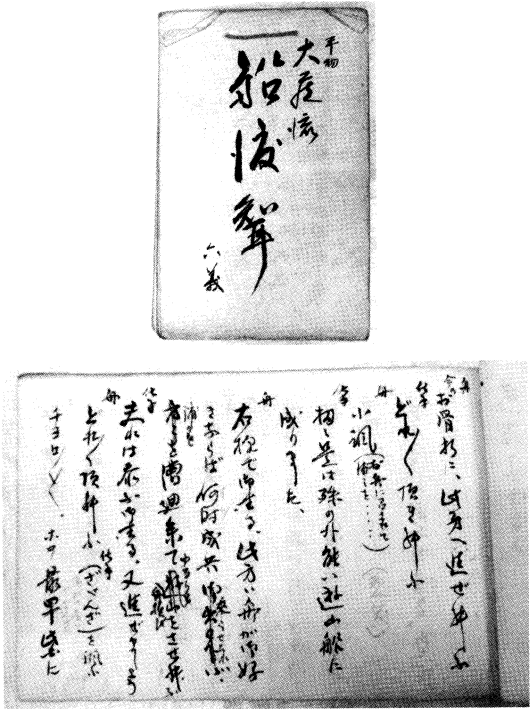


図 5 狂言台本「船渡聲」

- ・「山本東本」…江戸末期、初世東次郎則正書写
(小山弘志校訂、日本古典文学大系 狂言集、岩波書店、1960・61 年)
- ・「茂山真一本」…昭和 10～49 年 (1935・74)、11 世
千五郎真一書写
(北川忠彦校訂、日本古典文学全集 狂言集、小学館、
1972 年)

結論からいうと、徳松の台本は確かに茂山千五郎家の台本である。全体的に、茂山家との芸の相異がよくいわれる「山本東本」とは語彙の相異が多いのはもちろん、茂山家の現行本の規範となった「虎寛本」よりも「茂山真一本」のほうが筋の運びや台詞のいいまわしがよく合致している。例えば、「萩大名」の終曲部の台詞に「太郎冠者の向こう脛と鼻の先 (下線部は茂山家台本のみ)」²⁰⁾とあることから、そのことははっきりしている。

また、9 世千五郎 (徳松が師事した 12 世千五郎の曾祖父) が新たに取り入れた ²¹⁾茂山千五郎家独特の「唐音」(「唐相撲」の劇中歌) については、徳松が第 35 回名匠鑑賞能 (1959 年) で次アドとして多くの同好会メンバーといっしょに出演した関係か、写本 2 冊が残されている。

しかし、それでも、徳松台本と茂山真一本における語句の食い違いは少なくない。双方にある曲目のうち、最も相違の甚だしかった「吹取」について、次ページにまとめた。(他の共通曲は「月見座頭」「二人袴」「素袍落」「末広がり」の 4 曲。)

比較の前に付記しておく、徳松台本は役者の心覚えのためか、あるいは、別に型付 (舞台での所作や動き、簡単な演技内容の書き付け) がある前提なのか、ト書きが全くないので、これだけではドラマの内容 ²²⁾がわからなくなっている。但し、これほど台詞だけに終始した台本は、資料群中でも少なく、多くの台本には、注記(「(酒を) 呑ム」「笑」などの所作や、「呼出し常通」「同前」など演技内容) が付され、ときには、小舞にゴマ節があったり、足拍子を書き込んである。

改めて、「吹取」に戻ると、一読、びっくりするような違いの多さである。師について伝授 ²³⁾されている、こんなに台本が違っているのだから、日頃から稽古をとともにする関係 (同じ家系統どうし) でなければ、なるほど、ともに舞台に立つことはできないだろう ²⁴⁾。

結末の大幅な相違は、明らかな (意図的な) 差違だが、そのほかの相違点は、ひとことでいうと、言い回しの微妙な差である。狂言では似たようなシチュエーションが多用され、よく登場する定番の台詞回しが多いことから、入れ替えの利くような、ほぼ同じ台詞が頻出し(「心得ました」と「畏まってござる」、「有難う」と「忝う」など)、

狂言でよくある、同じ場面・掛け合いを繰り返して、おかしさを醸し出すテクニックでは、台詞が前後しても筋書きに影響しないため、こうした台本上の言葉遣いの微妙な違いが発生するのだろう。

このような台本の生成事情を窺わせる 2 世茂山千作 (10 世千五郎、12 世千五郎の祖父) の芸談があるので、以下に引用する。

狂言のお稽古ははじめことばだけを口移しで教えます。むろん無本でやるのです。狂言には昔から謡本のような刊行本がありません。師匠へ神文を入れて写した写本があるだけです (中略) 本無しで師匠のことばをすっかりそのまま身につけるまで、いつもいつもことばの稽古をいたしまして、その後ではじめて本を見せますが、これは後日万一忘れた時に思い出すためだけに見せるのです。²⁵⁾

それにしても、この「吹取」については、徳松台本と真一本の結末部分が多分に違いすぎる。女 (次アド) の台詞がたったひとことであったり、急展開して必要以上にどたばたと追い込みで終わらせたり、徳松台本は演劇としてややもの足りない感じがする。時間短縮や役者数の節約のために改変されたものだろうか。

最後に、ユニークな徳松台本を紹介しておこう。「狂言」とのみ題された、非常に短いものである。

狂言

某「罷り出たる者は、御宴に連なる者でござる。今日は お日柄も良うて婚儀の式も滞りなく相済み、このよう なめでたいことはござらぬ。さてそれにつき、某、日頃信心のいたす大黒天がござるによって、これよりそれへ参り、新郎新婦のお幸せの祈願をいたそうと存ずる。まず、そろりそろりと参ろう。イヤ、誠に嫁入りと申すことはツーとハレイなものでござって、某も昔のことどもを思い起こすことでござる。イヤ、何かと申す内、はや御前でござる。まず、拝のいたそう。アラ有難や、有難や。何卒新郎新婦の幾久しゅう仲良う暮らさしますように、守らせ候え、守らせ候え。アラ有難や、有難や。さて参っても思い出すことでござるが、御社が狭うござるによって、御伺いの立て、何卒して百畳くらいのもを建て寄進のいたしたいものでござるが、何とでござる。

大「いやそのように広うては掃除等に迷惑いたすによって、もそっと小さいが良い。

某「それならば四畳半くらいでは何とぞござる。

大「なかなか。

某「これはいかなこと、四畳半でもいまだ広いと仰せら

熊田徳松田蔵台本	茂山真一本（古典文学全集）
仕「罷り出たる物は、此辺りに住居致す者で御座る。某（＊）未だ定まる妻が御座らぬに依て、清水の観世音へ妻乞の祈誓を懸けて御座れば、夜前あらたなる御重夢を蒙って御座る。即ち、月の夜五条の橋に出て月に乗じて笛を吹くならば、其笛の音につれて良い妻を授けてやろうとの御事で御座る。去りながら、生れてより終に笛など吹いた事がござらぬ。何とがな致そうやれと存ずる処に、是に（笛吹人ノ名）殿と申して日頃お目を掛けて下さるお方が御座るが、殊の外笛の御上手で御座るに依て五条の橋へ同道申笛を吹いて貰ふと存ずる。先急いで参ろう。イヤ、誠に斯様な事と知ったならばかねがね笛の精古をも致そうものを、近頃残念な事を致した。（＊）イヤ、何かと申内申や是れで御座る。先案内を乞ふ。物申、案内申。（＊）笛「イヤ、表に（＊）物申とある。案内とお誰ぞ。（＊）仕「私で御座る。笛「エエ、（＊）そなたが。も早や日も暮れに及うだに、何と思ふておりやうたぞ。仕「されば其事でござる。此方も知らるる通り、私未だ定まる妻がござりませぬに依て、清水の観世音へ妻乞の祈誓を掛けて御座れば、夜前あらたなる御重夢を蒙って御座る。笛「（＊）其れは又何と云ふ御重夢であつたぞ。仕「迷算を叶へ度ば、月の夜五条の橋へ出て、月に乗じて笛を吹くならば、其の笛の音につれて良い妻を授けてやろうとの御重夢で御座つた。笛「ヤレヤレ、それは芽出度い事じゃ。して、今から五条の橋へおりやるか。仕「それに付き、只今来るも別なる事でも御座らぬ。私生まれてより終に笛など（＊）吹いた事が御座らぬ。此方は（＊）笛の御上手で御座るに依て、近頃御入道なから何卒五条の橋へ御出で下され、（＊）笛を吹いて下さりようならば有難御座る。笛「それは近頃やすい事なれ共、其方の妻乞の笛を身共が吹くと云ふは（＊）チト異なものではないか。仕「イヤ、近頃御尤では御座れとも、神仏は見通して御座るに依て、私が笛を吹かぬ（＊）事は観世音も能ふ御存じて御座るう程に、甚しうは御座りますまい。笛「（＊）其儀ならは行つて（＊）おまそうか。仕「それは忝ふ御座る。笛「（＊）笛の用意をしよう程に、暫くそれにお待ちやれ。仕「畏って御座る。笛「イヤ、唯々、笛の用意一段と罷ふおやり。 （＊）先ぞなたから行かしめ。	＊駈づかしながら お妻を授けて下されう それにつき お目を下さる かねがね／これを頼んで参り、某が名代に そろりそろりと／存じたり／常々 ＊お宿にさへござつたならば、吹いて下されぬと申すこともござるまい。 ＊聞き割れた声で／＊どなたでござる。 ＊そちらならば案内に及ばうか。なぜつうと通りは召されいで。 仕「私もさやう存じてはござれども、もしお客ばしござろうかと存じ、わざと案内を乞うたことでもござる。 笛「それはいつものがら、念の入つたことぢや。さて、只今参るも別なることでもござらぬ。／ら ＊して、／如何様な／あつたさればそのことでござる。／に お妻／下されうとのあらたなさてさて／すれば さればそのことでござる。 ＊を／＊かねがね 苦労／（何卒）／＊私の名代に 忝う なれど／＊こりや 近頃／。その上、 ＊という／何とぞ吹いて下されうならば忝うござる。 ＊これは近頃尤もぢや。／それならば行て／＊吹いて 有難う ＊今／する／待たしめ よい／＊さらば参らうか。仕「これは御苦勞に存じます。 笛「サアサア、／御料から出さしめ

仕「先效第に行かせられい。 笛「先とあらば身共から参ろう。サアサア、おりやれ、おりやれ。 仕「参ります。参ります。 笛「現今宵は何と良い月ではないや。 仕「仰らるる通り一段と良い月で御座る。 笛「五条の橋へ出たならば、又格別であらう。 仕「真にひとしをの眠めで御座らう。 笛「イヤ、何かと云ふ内早五条の橋へ参つた。（＊） ハハハハ、我も我も弁えたる月かな。（＊）今宵の座な限ない月は又あるま い。 仕「いつれ今宵の座な月は又と御座るまい。 笛「澄み渡る並も清し白砂の底名の橋の秋の夜の月と云ふ古歌が有るが、何と面白い事ではないか。 仕「申し申し、何卒始めさせられて下されい。 笛「笛か。 仕「左様で御座る。 笛「オオ、心得た、心得た。 仕「南無大徳大悲の観世音菩薩、アラ有難や、アラ有難や。 笛「ハハハ、あの辺りが稲荷山そうな。あの稲荷山に就ても何とやら云ふ古歌が有つたが、オオ、それぞれ、おそく共宿を出てつづ稲荷坂上れば下る都人哉、定めてあの辺りの事であらう。 仕「申し申し、歌も結構では御座れ共、何卒吹かせられて下されい。 笛「オオ、心得た、心得た。 仕「南無大徳大悲の観世音菩薩、アラ有難や、アラ有難や、申し出まして御座る。 笛「何が出た。 仕「あれに御夢想の御妻とみゑまして、（＊）つツくりと立たせられました。 笛「ドーレ、ドーレ。 仕「ハハハハ……。 笛「真にやごとなし御姿で立たせられた。 仕「定めてあの人の事であらう。 笛「去りながら入道へと云ふ事があるに依て先づ問うて御みやれ。 仕「何に問いまするか。 笛「中々。 仕「イヤ、私はすし問いにくう御座る。此方問ふてみて下されい。 笛「イヤ、こゝこゝな人が、其方のお妻じゃもの、其方問うてみさしめ。 仕「其上何とやら恥かしう御座る。平に此方問うて下されい。 笛「恥しいは身共とても同じ事じゃ。是非此方問うてみさしめ。 仕「へエ、それならば問うてみましよう。 笛「それが良からう。 仕「（＊）これは近頃恥しい事じゃ。エエ、エエ、申し申し、それへつツくり	こなたから それならば 何と何と／よい月 まことに限ない月 行た 仰せらるる通り、また／で 申す／＊仕「まことに、はや五条の橋へ出ました。 ／さてもさても／＊蟬の運ふまでも見ゆることと や。 （次） 心／申す／何と何と 始め アアそれ と申す古歌があつたが、 （次）／申し申し ＊袂衣を着て／立たせられてござる どれどれ 御夢想のお妻でござらう も／そなた 何、私が 何とやら／下されい 者／妻乞の祈誓をかけたはそなたではないか。と やかく言はず早う問はしめ。 （次） （次） それならば行て問ひませう。 早う問はしめ。 ＊さてきて、／（次）
--	--

仕「イヤ、左様にも御座らぬ。 笛「寝身共は頼まれた役はすんだに依て、イヤ、戻らう。 仕「ア一、申し申し、 <u>チト</u> 待って下さい。 笛「何も用はあるまい。 仕「先づ待たせられい。 笛「何事じゃ。 仕「最善からあの御妻は又しても又しても、此方の方へ寄せられます。どうでもあれは此方へ下されたもので、私へは又後程来るものでござろう。(＊) 此方連れて戻らせられい。 笛「コレコレ、投てむさとした。妻乞の祈誓をかけたは其方ではないか。身共は頼まれて笛を吹いた斗じりじゃ。其方の妻じやに依て其方連れて戻らしめ。 仕「ア一、申し申し、其上、私には <u>チト</u> 年も相にくう御座る。平に此方連れて戻らせられい。 笛「ア一、コレコレ、其上身共は宿元 ^{しゆくげん} に妻があるではないか。二人は更らぬものじや。是非共此方連れて戻らしめと云ふに。 (＊) 女「イヤ、申し申し、 <u>妻めはどちらの妻になるのでござるぞ</u> 。 仕「イヤ、此の人が笛を吹いたに依て此人の妻になるのじや。 笛「イヤイヤ、此の男が妻乞の祈誓をかけたに依て此の男の妻になるのじや。 女「左様に仰せらるるならば、妻は二人共夫に替らましよう。 <u>コチへ御座れ、コチへ御座れ、コチへ御座れ</u> 。 仕笛「ア一、許いて呉れい、許いて呉れい、許せ、許せ、許せ、許せ。	(女) (女)／もはや (女) 何と、待てとは 御夢想のお妻／ばかり寄られ これはさだめて／あとよりよいのが／＊これは 行かせられい イヤこな者が。 ただ名代に／我御料のお妻／ 何とやら／が／是非とも こりやこりや／女共／二人、妻はいらぬ。 そなた／行かしめ。身共は知らぬぞ知らぬぞ、知らぬぞ知らぬぞ。 ＊仕「まづ待たせられい、まづ待たせられい。さ てさて苦々しいことぢや。これはまづ何と致さう。 こなたはどれへ行かせらるるぞ／千年も万年も申 よう添はうとは仰せられぬか。妻が傍にゐて下さ れいなう、ゐて下さいなう。仕「ア、イヤ、 どれへも参らぬが、ちと忘れられた物がある。行て取 って参らう。女「イヤ申し申し、忘れさせられ た物があらば、妾が方より人をやりますやう。妾が 傍にゐて下さいなう、ゐて下さいなう。仕 「ア痛、ア痛、ア痛。女「才、何となされま した。何となされました。仕「虫腹がかぶつた。 行て葉を取って参らう。女「イヤ申し申し、お 葉ならば妾が方によいのがござる。あれを運ぜま せう。何とぞ妾が傍にゐて下さいなう、ゐて下 されいなう。仕「イヤ、それならば有縁を申さ うか。女「有縁を仰せられい。仕「有縁は、 女「有縁は、仕「忘れられた物もなし、女「なし、 仕「まだ腹も痛うはなけれども、女「なけれど も、仕「なんぼう身共ぢやというて、そなたの やうな悪女と、何の縁はるるものか。女「ア痛、 ア痛、ア痛。仕「アアうるさやの、うるさやの。 評せ許せ、許いてくれい許いてくれい。女「ヤ イヤイ、妾をこのやうにしたならば、観世音の罰 が当たらうぞ。あの横着者、誰そ捕へてくれい。 やるまいぞやるまいぞ、やるまいぞやるまいぞ。
--	---

いかな、いかな、取づかしうて聞はるることでは ござらぬ。こなた聞うて下さい。 聞はしめ。 (女)／聞ひませう。 それがよからう。 ＊こりや <u>近頃恥づかしいことぢや</u> 。 聞はるることではない。これはまづ何と致さう。 (女) (女) 申す／(女) 問うてみう。 (女) イヤ (女) 恥づかしさう ＊早う (女) (女) サアサア、まづかうござれ／＊笛「アアこりやこ りや、そなたはこれへ来るではない。そなたはそ れへ寄っておるやれ。 こりやこりや／それへ行くではない／。これへ寄 ってゐさしめ。 アアこりやこりや、身共はただ笛を名代に吹いた ばかりぢや。妻乞をしたのは／＊それへ寄ってお るやれ。 さてさて聞き分けのない。この人はただ名代に頼 うだばかりぢや。 をした／に 参つたと見えまして (女) それならば対面を致しませう。／＊笛「それがよ からう。 (女) とても そのままでは／お取りやれ それならば身共 進ぜう／かづいて と立たせられましたは、若しや御夢想の……、ハハハハ……、イヤ、申し申し、 中々、恥しうて聞はれませぬ。 笛「その敵な事てなるものか。のし切つて聞うてみさしめ。 仕「ハエ、それならばのし切つて聞うてみさしよう。 笛「早う聞うておみやれ。 仕「(＊)エエ、エエ、申し申し、それへつুকくりと立たせられましたは、若 しや御夢想のおツツツツ……、ハハハハ……、イカナ、イカナ、恥かしうて聞 われませぬ。是非共此方聞うて下さい。 笛「其様な事では妻は持たれぬ。思い切つて聞はしめ。 仕「才、おそれ、男の心と女仏の柱は太いが上にも太かれと申し上げる。此 度は思い切つて聞い升ふ。 笛「それが良からう。 仕「エエ、エエ、申し申し、それへつুকくりと立たせられましたは、若しや御 夢想のお一妻様では御座らぬか。何に、ウーム、ウーム、ハハハハ……、イヤ イヤ、申し申し、御夢想のお妻様では御座らぬかと問うて御座れば何も物は 仰せられず、唯うれしうに。 仕笛「ウーム、ウーム、ハハハハ……。 笛「すれは賢いもない御夢想のお妻じや。サアサア、(＊)是へ連れて渡しめ。 仕「それならば是へ連れて参りましょう。 笛「チャット連れて渡しめ。 仕「イヤ、嘘々、それならばこう通らせられい。(＊) ア一、これこれ、其方はどれへ行くぞ。其方の共は身共じや程に是へ寄つて おいやれ。 笛「其方はこれへ来るではない。其方の共はその男じや。(＊) 仕「ア一、これこれ、又それへ行くか。 笛「是は如何な事、身共は只頼まれて笛を吹いたばかりじや。 仕「妻乞の祈誓を掛け ^{かけ} たは身共じや、是れへ寄つておいやれ。ようようと合点 がいたと見えまして。 笛「その通りじや。それならばあれへ往て対面のさしめ。 仕「ハエ、心得ました。(＊) イヤ、嘘々、それならば対面のしよう程に、そのかつきをとらしめ。何にイ ヤじや。ハハハ……。投は恥しいか。イヤ、恥しいは身共とて同じ事じやが、 其様なものを着て同道もなるまい。平に取らしめ。何にいやじや。いやじや と云ふて、何時が何時まで其ままでいらるるものか。よしよし、私が取つて 進ぜよう。エエ、いやじやと云ふて何時が何時まで此の様なものを置いていら るものか。 笛「先は目出度うおりやる。	仕「イヤ、左様にも御座らぬ。 笛「寝身共は頼まれた役はすんだに依て、イヤ、戻らう。 仕「ア一、申し申し、 <u>チト</u> 待って下さい。 笛「何も用はあるまい。 仕「先づ待たせられい。 笛「何事じゃ。 仕「最善からあの御妻は又しても又しても、此方の方へ寄せられます。どうでもあれは此方へ下されたもので、私へは又後程来るものでござろう。(＊) 此方連れて戻らせられい。 笛「コレコレ、投てむさとした。妻乞の祈誓をかけたは其方ではないか。身共は頼まれて笛を吹いた斗じりじゃ。其方の妻じやに依て其方連れて戻らしめ。 仕「ア一、申し申し、其上、私には <u>チト</u> 年も相にくう御座る。平に此方連れて戻らせられい。 笛「ア一、コレコレ、其上身共は宿元 ^{しゆくげん} に妻があるではないか。二人は更らぬものじや。是非共此方連れて戻らしめと云ふに。 (＊) 女「イヤ、申し申し、 <u>妻めはどちらの妻になるのでござるぞ</u> 。 仕「イヤ、此の人が笛を吹いたに依て此人の妻になるのじや。 笛「イヤイヤ、此の男が妻乞の祈誓をかけたに依て此の男の妻になるのじや。 女「左様に仰せらるるならば、妻は二人共夫に替らましよう。 <u>コチへ御座れ、コチへ御座れ、コチへ御座れ</u> 。 仕笛「ア一、許いて呉れい、許いて呉れい、許せ、許せ、許せ、許せ。
---	--

る。それならばいかほどぐらいが良うござる。
大「この大黒天は何々家の繁昌が一良い。
某「ハァー。

完

※読みやすいように、適宜、句読点を補い、旧字体漢字を新字体に、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改め、一部漢字をひらがな表記した。下線は筆者。

落ちが「半畳」と「繁昌」をかけた秀句になっている。「何々家」(下線部)にめでたく結婚した当家の名前を入れ、余興に上演されたのだろう。コンパクトな内容なので、あるいは徳松自作かと思われるが、どうだろうか。資料群には「婚礼歌」と題された写本もあり、徳松は、おめでたい席に喜ばれる存在だったのかもれない²⁶⁾と想像をたくましくしている。

最後に、狂言台本以外の謡本の写本も見ておこう。徳松は人に謡を教えていただけに、これら謡本は、自分でゴマ節や直し(謡曲のメロディ部分の演出記号)を付けることが得意だったのだろうか、細かい記号も丹念に書写している。ただ、蘭曲は刊行されている謡本(例えば、前記の刊行会本)と異なる節付(とくに「定家一字題」は全く異なる)が見られ、どういう経緯で付したものか興味がそそられるところである。

また、写本「忠霊」は戦時中の新作能で、表6のとおり東海地方でも盛んに上演されている。この曲は英霊をシテに、昭和16年(1941)大日本忠霊顕彰会の委嘱で制作、直後から全国各地で上演された国策能で、同種の時局もの「皇軍艦」(大本営海軍報道部委嘱)とともにレコードにもなった²⁷⁾。明治維新によって動揺させられたように、高踏的なイメージのある能楽界もときの権力趨勢と無縁ではいられず、第二次世界大戦中には皇室を扱った演目(「蟬丸」「大原御幸」など)の上演自粛や詞章の改変を余儀なくされた²⁸⁾。「忠霊」は時局への能楽界

の迎合ともいえる。戦時中の徳松の趣味生活はどうだったのだろうか。「忠霊」ならば、おおっぴらに謡うことができたのか。

2 近代能楽ブームと熊田徳松資料

前章までに徳松資料の内容を示し、1-1では徳松らが多く同好会に籍を置いて、能楽を楽しむようすを概観した。徳松資料がカバーする昭和20~30年代はこうした人々が多かったと見え、例えば、昭和31年(1956)3月1~2日、岐阜邦楽協会と中部日本新聞社、ラジオ東海と共催した第1回岐阜邦楽大会では、長唄・箏曲・小唄・雅楽とともに能楽の同好会が出演しており、新聞記事は、鶴声会・誠交会・掬水会(以上、観世流)のほか金剛流と囃子の桂会らが連日猛稽古を重ねていると報じている。鶴声会の丹下三義師は週3日の稽古日でもさばききれず、連日出稽古の日々だという²⁹⁾。徳松の時代から下るが、昭和55年(1980)4月6日には岐阜能楽会が岐阜市能舞台建設記念謡曲大会を開催、県下15ヶ所の能の教場と2ヶ所の囃子の教場から生徒約200人が出演している³⁰⁾。岐阜県と経済圏を同一にする愛知県では、昭和30年代(1955-64)、東海銀行・トヨタ自動車・トヨタ車体などで企業内の謡曲サークルが活況を呈し、トヨタ謡曲部は部員数50人にもなり、一度に活動できないため班行動になったという³¹⁾。まさに空前の能楽ブーム³²⁾だったのだ。

現在、岐阜県では能楽が盛んとは言い難い。県内には、常時、能楽が上演される能楽堂はなく(寺社に文化財としての舞殿はあっても)、先に挙げた新聞記事の「岐阜市能舞台」も今はどうなったものか、設置された岐阜市中央青少年会館のホームページ³³⁾には全く触れられていない。しかし、舞台がないからといって、能楽が振るわない理由にはならないだろう。事実、能楽堂がなくても、徳松の時代には活発に上演されていたし、その多くがいわゆる素人の自演会(素人会)だったのである。名古屋

表6 「忠霊」演能記録

	演奏	上演日	会	会場
1	能	昭和16年11月27日	新作能「忠霊」演能会	名古屋能楽堂
2	囃子	昭和16年12月21日	名古屋能楽文化協会 皇軍戦勝武運長久祈願祭式	護国神社拝殿
3	能	昭和17年2月8日	長能会 観世流定期能 第3期第1回	名古屋能楽堂
4	能	昭和17年9月19日	名古屋能楽会 市内護国英霊慰安祭御遺族招待会	名古屋能楽堂
5	能	昭和17年9月19日	名古屋能楽会 市内護国英霊慰安祭御遺族招待会	名古屋能楽堂
6	囃子	昭和17年11月3日	津島神社奉納	津島神社神前(津島)
7	能	昭和18年5月29日	新作能「忠霊」披露招待能 第1回	岐阜市公会堂能楽舞台(岐阜市)
8	能	昭和18年5月29日	新作能「忠霊」披露招待能 第2回	岐阜市公会堂能楽舞台(岐阜市)
9	囃子	昭和18年9月11日	田鍋守正7周年祭慰霊能	名古屋能楽堂
10	能	昭和18年10月4日	名古屋能楽会 軍事援護協調週間協賛遺家族各位御招待会	名古屋能楽堂

能楽番組検索システム(<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~miki/search.html>)より作成

の狂言共同社の機関誌『狂言』（1956-77）³⁴⁾の「お披露（段階的な教授システムにおけるステップアップ曲の初演）のおしらせ」欄を見ると、昭和 30 年代に目立って記事が増えてくる。とくに、女性の名前が増加する。これは、たくさんの素人弟子の熱心な稽古の反映であり、かつ、それを醸成した当時の社会風潮の反映であったと考えられる。即ち、「世阿弥ブーム」と「狂言ブーム」である。

「初心忘るべからず」などの名言で、日本人なら誰もが知る世阿弥も、明治末以前はほとんど無名の存在だった。信じられない話だが、世阿弥が日本芸術・思想史に現れたのは、明治 42 年（1909）、わずか 100 年前のことなのだ。このとき、歴史家・吉田東吾によって世阿弥の伝書が公刊され、広くその思想が知られるようになった。それは、明治末～大正時代、岩倉具視らが牽引し、当時の文化人らに指示が拡大しつつあった能楽振興運動と軌を一にするものだった。当初、政財界の上流階層が担った運動は、やがて学术界に拡大、能楽に対する学究的な興味が盛んになった³⁵⁾結果ともいえるだろう。昭和 2 年（1927）には『花伝書』が岩波文庫にラインナップし、上流紳士の遊芸だった能楽が、若い知識人たちの関心の的になり、世阿弥ブームの様相を呈した³⁶⁾。

それに付随するかのようには、能楽の当事者たち、能楽師の意識改革も進む。当初、「江戸式楽でなければ能は保てな」く、「今のように大衆に切符を売って演能を成立させる、なんて考え方はなかった」能楽関係者たちが、「能は習い事ではなく演劇として成立するものである」と考え始めた³⁷⁾のだ。

「江戸式楽である」とは、格式とプライドの謂いで、要は、上流階級しか相手にしないということだ。明治・大正時代の能楽師が教授する相手を選び好みしていたことが指摘されている³⁸⁾。はじめ、能楽師は中流以下の階級や女性には教えようとしなかったし、違反者を規制しようとした³⁹⁾。名古屋でも、女が上がったため能舞台が穢れたので、狂言師の申し立てにより舞台の板を削って浄めたという話が伝わっている（観世流準職分で元士族の林愿藏の伝聞）⁴⁰⁾。さらにいうなら、上記のエピソードが狂言師からの進言だったというのは、商家の檀那芸として狂言が習得されてきた⁴¹⁾名古屋ならではの特殊事情もあったのだろう。狂言方が「皆お金持ち」の名古屋に客演に来た 4 世茂山千作（12 世千五郎）は、シテ方より「えらいええ座敷」でお抹茶にお酒まで出てくるように驚き、「子供心に名古屋の人はみんな金持ちで偉い人ばかりだ」と思ったという。「名古屋はお楽しみで狂言をされている」のだともいっている⁴²⁾。岐阜の大地主

であった徳松が能楽に親しみ、とりわけ狂言を好んだきっかけも同様だったろう。彼の同好会仲間も、医師や学校長など社会的高位の人々が多い。

加えて、当時は「狂言ブーム」だった。関西に、11 世茂山千五郎が健在で、ほかに茂山（善竹）弥五郎・3 世忠三郎があり、東京には、6 世野村万蔵・9 世三宅藤九郎という名優が一度期に登場する希有な時代であった。そして、なんとといっても、西の茂山兄弟（4 世千作・2 世千之丞）と東の野村兄弟（2 世万作・万之介）という当時 20 代のとびきりの才能が揃っていた。彼らは、いまや伝説的な存在となった観世寿夫らとともに、前時代的な能楽協会のひんしゅくを買いながら、武智鉄二の武智歌舞伎や新作能・新作狂言、さらに狂言技法によって翻案された新劇等に積極的に参加して、狂言のドラマとしてのおもしろさや舞台芸術としての完成度の高さを世に知らしめた。これによって、それまでの享受者とは別の階層にまで能楽が拓かれ、皮肉にも、能楽師たちの矜持のため長く阻害されてきたこれらの人々によって、能楽が舞台芸術として展かれたのである。とまれ、この黄金期に同時代人として生きた徳松がうらやましくなる。さぞかし、稽古は楽しく、自演会は刺激的だったに違いない。

おわりに

ところで、能楽の公演が一度限りであることはあまり意識されていないが、その受容形態に大きな影響を与えている。つまり、1 ヶ月以上も公演を続ける歌舞伎のようにチケット収入（出演料）だけで出演者の生活を賄うことが難しいのだ。そのため、兼業していない限り、大部分の能楽師が、素人弟子の月謝収入と素人会への出演によって収入の多くを得ている。そして、それらの弟子の大半が師匠の出演する演能会を鑑賞する。後継者と鑑賞者双方の開発が同時に行われている⁴³⁾ともいえる。この「お素人のお稽古ごとに依存している現在の能」に警鐘を鳴らした人物がいる。2 世茂山千之丞である。兄 4 世千作とともに狂言ブームの雄であり、平成 22 年（2010）に惜しまれながらこの世を去った千之丞は、その子ども世代（2 世七五三真吾、千三郎、あきら）・孫世代（正邦、茂、宗彦、逸平、童司）が巻き起こした第 2 次狂言ブームの渦中で上の発言をした⁴⁴⁾。

岐阜県に限らず、能楽愛好者層は先細りの現状である⁴⁵⁾。現在のところ、能楽は若い層の関心を得ることに失敗している。若者の入門がないまま、稽古をする人たちがどんどん高齢化し、やがて稽古を辞めてしまい、つぎの世代に担い手が不在の状態である。教える側も若い世

代が育っていないので、老先生が引退すると、続けたくても稽古場を失ってしまう人が少なくない。こうして、徳松世代の昭和能楽ブームで急増した素人弟子たちが高齢化する現在、謡本の大量古本が出現している⁴⁶⁾。郷土史における能楽愛好を物語る、この興味深い徳松資料の寄贈事情もまた、その一端に連なるのである。

末尾ながら、貴重な資料をご寄贈いただき、また、調査にご協力賜りましたご遺族・関係者に深謝申し上げます。

註

- 1) 「能楽」は明治以降の新語で、能と狂言の双方を指す総称。狂言を含まない場合もあるが、本稿では総称として使用し、一方のみを表す場合は、「能」「狂言」と表記する。
- 2) 表1および表3、表6は、飯塚恵理人(椋山女学園大学)HPの能楽番組検索システム(データ提供・東海能楽研究会)を利用して作成した。アドレスは表中参照。なお、本稿に掲載したHPはいずれも平成25年(2013)1月5日現在閲覧可能である。
- 3) 寄贈資料群中に「16才より初める」とのメモ書きがあった。このメモの記述者は不明。
- 4) 橋岡家は大阪の観世流名家。久太郎の時代に東京に出て観世家元の内弟子となり、重きをなした。大阪時代からの門弟会を淡交会といい、久太郎上京後は、弟子の下田益三・雄三父子が預かった。(米田真理(2012). 貴書に学び、稀書と遊ぶ 能楽師下田益三(明治後～昭和初)による書籍収集, 朝日大学経営論集(26).) 久太郎弟子の下田雄三は、岐阜淡交会をはじめ、東海地区に多くの門弟を持った。また、久太郎門弟会には別に長能会があり、主に名古屋を中心に活動していたようである。(飯塚恵理人(2008). 昭和二十三年の名古屋能楽界 雑誌『能』の「名古屋だより」から、東海能楽研究会年報(12).) 徳松の時代は、7世橋岡久太郎(1884-1963)の活動期に当たり、8世久馬を経て、現在は9世久太郎が活躍中である。(九世橋岡久太郎公式サイト <http://www.catv296.ne.jp/~hashioka/index.html>)
- 5) 観世流職分。橋岡久太郎に師事。武蔵野市在住。(寄贈資料・書簡等より。)
- 6) 観世流準職分。(東海能楽研究会(2011). 能楽を愛した人々の思い出集 「近代名古屋の能楽を支えた人々」に向けられた手紙より、同会, p.10.)
- 7) この名称も、「能楽」同様、明治以降のもので、それ以前は「能役者」「狂言役者」と呼ばれていた。能楽＝能狂言とする本稿(前掲1))では、主に総称として「能楽師」を用いたが、「能役者」のみを指す場合も煩瑣を避けて注記しない。
- 8) 徳松遺族よりご教示賜わり、現地で確認できた。
- 9) 「文化の日」は昭和23年(1948)に公布・施行された祝日法で定められたことから、当時、新奇な名称としてわざわざ標記されたものだろうか。
- 10) 当時の謡稽古で刊行会本を使った人物は「その読みやすさは全く驚いたものであった」と証言している。(東海能楽研究会, (2011). p.117)
- 11) 明治維新後、幕藩体制という庇護者を失い、混乱す

る能楽界を東京に残って支えた(観世家元は徳川慶喜に従って静岡に移っていた)梅若家が、家元に断りなく免状を発行したことに端を発し、観世流から梅若流分立(後に観世流復帰)にまで発展した明治40年代～昭和29年の能楽界における紛争。

- 12) 山崎有一郎(2006). 昭和能楽黄金期 山崎有一郎が語る名人たち, 檜書店, p.60.
- 13) 太郎冠者、主人の略。
- 14) 小林責(2008). 狂言ハンドブック第3版, 三省堂, p.23. など。 謡本は早くから板本が刊行され、江戸時代を通じてのロング/ベストセラーであったが、狂言台本は、明治末になって漸く翻刻されるようになるものの、流儀が曖昧で省略も多く、内容の確実な台本が公開されるのは、昭和17年(1942)の岩波文庫『能狂言』を嚆矢とする。(池田廣司(1967). 古狂言台本の発達に關しての書誌的研究, 風間書房, pp.13-14.)
- 15) 例えば、現役狂言役者の次の発言がある。(※)は筆者注記。 「(※野村) 萬斎さんが、(※4世茂山) 千作さんと一緒にやられたときに毎日違うと言っていました。(※以上、土屋恵一郎の発言)」「違う場合がほとんどです。舞台の中ではなく、お客さんの反応を受け入れて、自ずと自分なりに狂言を変えている(※以上、2世茂山七五三の発言)」(野村萬斎(2003a). 狂言三人三様 茂山千作の巻, 岩波書店, p.52.) 「私(※野村万作)が父(六世野村万蔵)から習った台本を自分ではっきりと変えて、新たにつくったのが『素袍落』や『月見座頭』です。『素袍落』は茂山家のやっているのも参考にさせてもらい、和泉流の他家のものも参考に、新しく自分なりの台本をつくりました。」(野村萬斎, (2003a). p.131)
- 16) 「大蔵、和泉の流派の区分は芸術的にはほとんど意味をなさない。各家ごとに台本、演出、演技の質が異なっており、実際は家が芸術的に分立している状態にあるのである。」(伊藤茂(1994). 能楽伝承制度論, 神戸学院大学人文学部紀要(9).)
- 17) 前掲14) (小林, (2008). p.82.)
- 18) 土筆会は現在活動停止中だが、平成10年(1998)には4世茂山千作弟子の丸石やすし師が来岐して指導に当たっていた。(岐阜新聞(1998). ぎふの仲間たち 狂言の『土筆会』岐阜市, 4月18日.) 旧メンバーへの聞き取りによると、装束等は会員の自弁、会共有財産や書類はないとのことだった。
- 19) 永井猛(2002). 狂言変遷考, 三弥井書店, pp.19-21.
- 20) 野村萬斎(2003b). 狂言三人三様 野村萬斎の巻, 岩波書店, p.132.
- 21) 喜多六平太(1978). 二世茂山千作「狂言八十年」, 日本の芸談第3巻 能 狂言 文楽, 九藝出版, p.158.
- 22) シテ(妻乞した男)がアド(笛吹き)に妻乞で得た女を押しつけようとするのは、ひどい醜女であったため。
- 23) 茂山千之丞取立・大蔵弥太郎発行の免状によれば、徳松は「末広かり外四十四番」を伝授されている。ちなみに、寄贈資料群中の台本は29番のみ。
- 24) 異流どうして共演することはほとんどないが、4世千作と大蔵弥右衛門、野村万作が共演したときのことを、千作が「家も違うし、台詞も違うので」、万作には台詞の掛け合いの少ない役を振り分けたことを語っている。前掲20) (野村, (2003b). p.132.)
- 25) 前掲21) (喜多六平太, (1978). pp.148-149.) 以下も参照。「伝授においては、まず、繰り返しに

- よる技術の習練がある。それに口伝のことばがくわえられ、最後に書かれたものが渡されるというのが、一般的順序といってよいだろう。」(藤田隆則(2002). 能の音楽の伝授 身体的な繰り返しと『ことば』, 人文学報(86).)
- 26) 徳松師匠の茂山家は「お豆腐狂言」がキャッチフレーズ。万能おかずである豆腐のように気安く、結婚式の余興に呼ばれたことも多いという。(前掲 15、p.22)
- また、茂山家だけでなく、野村万作家でも、結婚式の余興などに呼ばれて「末広がり」を上演していた。(野村万作(1990). 父万蔵との稽古, 観世栄夫編『日本の名随筆 87 能』, 作品社. 所収)
- 27) 船木拓生(2007). 評伝観世榮夫, 平凡社, pp.168-170. 前掲 6(東海能楽研究会, (2011). p.63). NHK 戦争証言アーカイブス、日本ニュース第 7 号(1941 年 11 月 11 日)
http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001300460_00000&seg_number=001
 では動画が視聴できるほか、橋本久太郎がシテを勤めた名古屋能楽文化協会の演能会について、須田国太郎がスケッチしたデッサンが大阪大学附属図書館に所蔵されており、下記で閲覧できる。
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/e-rare/suda/programs/072.htm>
- 28) 中村雅之(2004). 戦時体制下における天皇制の変容「蟬丸・大原御幸事件」と謡曲改訂, 能と狂言(2.).
- 29) 中部日本新聞(1958). 邦楽グループ④ 能楽の巻, 2 月 22 日, p.5 岐阜市内版.)
- 30) 岐阜日日新聞(1980). 岐阜市初の能舞台／県下のファン続出／謡曲大会でこけら落とし, 4 月 7 日, p14 岐阜県内版)
- 31) 前掲 6(東海能楽研究会, (2011). p.46, 50)
- 32) 堀上謙、小林保治、丸岡圭一(2006a). 能界展望 謡本最近事情をめぐって, 新・能楽ジャーナル(33). に「謡曲ブーム」とある。
- 33) <http://www.city.gifu.lg.jp/c/22179002/22179002.html>
- 34) 飯塚恵理人(相山女学園大学) HP, 資料提供 佐藤友彦先生・野崎典子
<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/kyogen1.htm> より閲覧
- 35) 横山太郎(2004). 世阿弥発見 近代能楽史における吉田東吾『世阿弥十六部集』の意義について, 超域文化科学紀要(9).
- 36) 前掲 27(船木, (2007). pp.27-30)
- 37) 土屋恵一郎(2008). 幻視の座 能楽師・宝生閑聞き書き, 岩波書店, p.36.
- 38) 飯塚恵理人(2005). 能楽の普及と『階級』 大正初期の能楽観, 東海能楽研究会年報(9).
- 39) 2 世茂山千作は、初世井上八千代に「三番三」を教えるなどして「みなからとやかく言われ」「苦しい立場におかれ」と語っている。前掲 21(喜多六平太, (1978). p.108)
- 40) 前掲 6(東海能楽研究会, (2011). p.11).
 昭和 12 年(1937) 生まれの 4 世山本東次郎(大蔵流)も子ども時代の思い出として、叱られても、舞台に逃げ込めば、母親が上がってこられなかったと語っている。(原田香織(2010). 狂言を継ぐ 山本東次郎家の教え, 三省堂, p.99.)
- 41) 林和利(2007). なごやと能・狂言 洗練された芸の源を探る, 風媒社, pp.134-135.
- 42) 前掲 15(野村萬斎, (2003a). pp.53-54)
- 43) 八木匡, 白井喜法, 高島知佐子(2012). 伝統芸能における実演家組織の収益システム, 文化経済学(9 巻 1 号).
- 44) 前掲 15(野村萬斎, (2003a). pp.272-273)
- 45) 中日新聞(2013). 能楽の魅力体験シテ, 1 月 8 日夕刊, p.3 総合.) は、「稽古人口が大幅に減り」「危機感が高まった」能楽師が開く小学生向け教室が増加していることを報じている。記事によると、「かつては会社のサークルなどで多くの愛好者がいたが、趣味の多様化とともに斜陽化が進み」「ファンも能楽師も高齢化している」。
- 46) 前掲 32)堀上謙, 小林保治, 丸岡圭一(2006a). および、堀上謙, 小林保治, 丸岡圭一(2006b). 謡本最近事情をめぐって (2), 新・能楽ジャーナル(34).

年	月	社会	全国	東海
昭和21	1946		流名と家元姓統一して、山形を和泉に改姓 時重名曲能(新聞社)・芸術祭能(文部省)など演能会が復活 24世大藏弥太郎が上京 7世野村太良(のち7世万蔵)の冠春会第1回公演 GHQ命令で梅若流に能楽協会から出演 能楽協会が機関誌「能」発刊 文楽界が因会と三和会に分裂	
昭和22	1947	11		
昭和23	1948		9	花友会が東西合同狂言会開催(1949にも) 津村紀三子が能楽協会に入会、初の女性能楽師 この頃、鶴世喜之、橋岡久太郎、大槻十三、山本博之らが来名 武智鉄二「武智歌集枝」 能楽協会の古屋支部結成
昭和24	1949	10		
昭和25	1950	10		
昭和26	1951			この頃、松坂慶ホールに特設舞台 岐阜財交会(奥善助指導)発足 この頃、名古屋能楽堂再建の募金活動開始
昭和27	1952	9	サンフランシスコ平和条約 6 4	この頃、名古屋能楽堂による「狂言と京舞の鑑賞会」 野上記念法政大学能楽研究所設立
昭和28	1953	11		御園座で五流能(中日新聞社) 梅観問題再燃、金養流謡本問題(昭和版の私的改訂) 武智鉄二演出・新作狂言「薄き川」初演 この頃から三宅勝九郎が新橋芸妓に狂言・小舞を教える 能楽協会の幹派で六郎家が観世流復興(観梅問題の解消) 東京に能楽三役養成会発足 武智鉄二制作・演出で「能・狂言の様式による創作劇のタ」 水道橋能楽堂で第1回宝生流学生能全国大会
昭和29	1954		11	
昭和30	1955			神武景気 白木屋デパート・白木ホールで「白木狂言の会」 田鶴忍太郎80周年を祝い日加寿能(3日連続) 『芸術新潮』『能楽タイムズ』に「狂言ブーム」記事 茂山千之丞が矢車座(中村富十郎主宰)出演で能楽協会より物議
昭和31	1956	3	5	武智鉄二制作・演出「円型劇場形式による創作劇のタ」 この頃、能楽書林から「新装決定版」謡本刊行されるが中断 茂山千作連善能で「唐相撲」上演 丹下三藏が岐阜市千手堂に能楽堂を建設 第1回中日五流能(～1974)
昭和32	1957	1	8	名古屋大学などの学生による「能と狂言の会」、各地で学生能盛ん 大藏流・和泉流狂言鑑賞会、狂言ブームの頂点 田鶴忍太郎ら度談会(名古屋能楽界の今昔) 能楽が重要無形文化財総合台指定される 重要無形文化財総合台指定「能楽」指定保持者による日本能楽会発足 東京能楽鑑賞会(～1972)
昭和33	1958			6世野村万蔵が芸術選奨文部大臣賞受賞、狂言師初 中朝能楽師会発足 第1回岐阜邦楽大会、菊水会・鶴声会らが出演 愛知文化講座特設能舞台で朝日五流能(朝日新聞社) 名古屋で第5回学生能全国大会 京都観世会館能舞台でクリスチャン・ディオール社がフアッシジョンヨ、茂山家が失演
昭和34	1959	岩戸景気	8	狂言共同社と朝日新聞社が第1回朝日狂言会開催(～1999) 12世野村又三郎が名古屋に移住
昭和35	1960	伊勢湾台風	9	『藤田流笛唱歌集』を刊行 能楽協会名古屋支部が大衆能を復活公演(～1997)
昭和36	1961		1	この頃、市民狂言会(京都市)など各地で狂言上演が盛ん 大藏虎明300年祭
昭和38	1963		3	名古屋和泉会(徳川義親会長)結成 橋岡久太郎没
昭和39	1964		10	6世野村万蔵・万作がワシントン大学(シアトル)アジア芸術センター講師に招聘、北米各地で公演 茂山弥五郎に金春信高から善竹枝が贈られる 観世栄夫・茂山兄弟が日生劇場こけら落とし、武智歌舞伎に出演、能楽協会除名問題に 善竹弥太郎が重要無形文化財各個認定、狂言方として初
昭和41	1966		11	京都能楽養成会、大阪能楽養成会が発足 水道橋能楽堂で「茂山千作・千五郎襲名狂言会」、茂山千五郎家初の東京公演 四大学狂言研究会連絡協議会による第1回狂言の会
昭和42	1967		4	茂山狂言会発足、千五郎・千之丞が日本能楽会委員に

※出典

横道萬里雄、小林貢(1996). 能・狂言、岩波ゼミナーブックス(59). 岩波書店.
野上誓一郎編(1990). 総合新訂版 能楽全書 第5巻 (1990年4版、1990年初版)、東京創元社.
表章(2010). 謡曲研究の今昔、神戸女子大学古典芸術研究センター紀要(3).
田鶴忍太郎(1958). 小蔵芸話、わんや書店.
東海能楽研究会(2005). 東海能楽研究会十周年記念論集、同会.
古川久(1960). 狂言の本文、日本古典文学大系月報(39).
「狂言」(狂言共同社) 1956-64、<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~tuka/erito/kyogen1.htm>より閲覧)
橋山太郎(2004). 世阿弥発見 近代能楽史における吉田東雪『世阿弥十六部集』の意義について、超域文化科学紀要(9).
能楽会伝える 育てる 広める 国立能楽堂25周年(文部科学時報1992、2008年9月)
中村雅之(2004). 戦時体制下における文楽劇の変容『舞丸・大原師幸事件』と謡曲改訂、能と狂言(2).
岐阜新聞、中日新聞